



TITLE:

彙報(2007年1月～2007年12月)

AUTHOR(S):

---

CITATION:

彙報(2007年1月～2007年12月). 人文學報 2008, 97: 149-165

ISSUE DATE:

2008-08

URL:

<https://doi.org/10.14989/71080>

RIGHT:

## 彙 報

2007 年 (平成 19 年) 1 月～2007 年 (平成 19 年) 12 月

### 研 究 状 況

#### 人文学研究部

##### 複数文化接触領域の人文学

班長 田中雅一

今年は、本研究班の実質 2 年目に当たる。初年に引き続き参加者の個別発表と『カーブル』の会読という 2 本立てを柱に活動した。具体的な報告内容については本研究班のホームページを参照して欲しい。この研究班は人文学国際研究センターの拠点プロジェクトでもあることから、センター主催の国際シンポや講演会も重要な活動の一部をなす。また、研究会の成果の一部は『コンタクト・ゾーン』誌公刊という形で公表した。

##### 研究会記録 (2007 年)

- 1 月 15 日 「ヴェーダの「発見」— 古代と現代との接触」 藤井 正人
- 2 月 19 日 「接触領域における暴力の記憶 — 台湾先住民族タイヤルと日本人」 中村 平
- 5 月 14 日 「接触領域におけるミメシス — 南インドの商業移動民ヴァゲリの信仰変容をめぐる」 岩谷 彩子
- 5 月 21 日 「“輸入” された食品でローカル・アイデンティティを構築する — 日本の小豆島で創り出されたオリーブの伝統」 ティナ・ペネワ
- 6 月 4 日 「接触領域としてのプリント布 — 東ア

フリカ「カンガ」とインド染色職人集団」 金谷 美和

- 10 月 1 日 「接触領域としての邪視信仰 — 現代カトリック、マルタにおける悪魔学の再編について」 藤原久仁子

- 10 月 22 日 「『カーブル』会読 6」 (pp. 52–62) 田中 雅一 (会読)

- 11 月 5 日 「インド・イスラームと「複数文化接触」：スーフィズムを通して」

二宮 文子

コメンテーター：東長 靖

- 11 月 19 日 「『カーブル』会読 7」 (pp. 63–73) 神本 秀爾 (会読)

- 12 月 3 日 「日本考古学の文化領域論 — 土偶の型式論をめぐる」 磯前 順一

##### 移民の近代史 — 東アジアにおける人の移動

班長 水野直樹

19 世紀後半から 20 世紀前半の時期、東アジアにおいて様々な理由 — 世界資本主義システムへの包摂、日本帝国の膨張、各地域の社会的変動など — から、大規模な「人の移動」が生じた。しかし、この問題についての研究は、各国・地域別に論じられる傾向があり、総合的に考察されることは少なかった。本共同研究 (2006 年 4 月–2009 年 3 月) は、主に日本、朝鮮、中国など各地域間の人の移動とその原因を検討し、人の移動の歴史的意味を考察することを目的として、歴史学 (日本史・朝鮮史・中国史など)、地理学、社会学、経済学など諸分野の研究者の共同研究として運営している。

# 人 文 学 報

## 研究会記録 (2007 年)

1 月13日 「長期の19世紀アジアを求めてー 帝國・ネットワーク・自由貿易」

籠谷 直人

「米軍政期における在朝中国人の移動に関する研究」 李 正熙

2 月10日 「朝鮮人渡航管理と「渡航阻止制度」ー 1920 年代後半を中心に」

福井 讓

「戦後日本社会と満洲引揚者、中国帰国者」 蘭 信三

3 月10日 「「文化政治」初期 (1919～1924 年) の政治空間と在朝日本人」 李 昇燁  
「在満朝鮮人の映画受容ー『満鮮日報』の巡回上映をめぐる」

金 麗實

5 月12日 「在満朝鮮人の就籍問題と創氏改名」

水野 直樹

「東北アジアにおける華人移動の変遷」

上田 貴子

6 月16日 「満洲移民の戦後経験と地域社会：岐阜県の事例を中心に」 猪股 佑介  
(書評) 山本有造編『「満洲」記憶と歴史』(京都大学学術出版会)

安岡 健一

7 月 8 日 「戦時期華北・華中の朝鮮人」

宮本 正明

(書評) 米山裕・河原典史編『日系人の経験と国際移動』(人文書院)

竹沢 泰子・水野 直樹

9 月15日 「在満朝鮮人共産主義者の革命観と民族観ー 南満における中国共産党内部の民族問題を中心に」 金永 哲

「韓国における戦時動員調査活動についてー 強制動員被害真相糾明委員会の報告書を中心に」 李 昇燁

10 月13日 「台湾を経由して華南地方に渡航した朝鮮人「慰安婦」たち」 藤永 壮  
「戦時期における朝鮮人渡航管理政策について」 福井 讓

11 月10日 フィールドワーク 「1920 年代朝鮮

人・中国人労働者が従事した建設工事」(京都市左京区比叡山ケーブルカー・ロープウェイなど)

12 月 8 日 「華僑史研究の動向と論点」

籠谷 直人

「植民地下新義州朝鮮華僑についてー 1920 年～ 1936 年」 宋 伍強

## 虚構と擬制ー 総合的フィクション研究の試み

班長 大浦康介

3 年目にあたる 2007 年は、サブカルチャー、天皇制、心理学/精神分析、人類学、歴史叙述等とフィクションとの関係を探った。また 11 月には「西洋のフィクション・東洋のフィクション」というテーマで国際シンポジウムを開いた。

## 研究会記録 (2007 年)

1 月15日 「ゴシック・ロリーターファッションのなかの“Cool Japan!”」

小野原教子 (兵庫県立大学)

2 月 5 日 「近代日本と神武天皇の顕彰」

高木 博志

2 月19日 「プロレスの「虚実」をめぐる二、三のことから」 師 茂樹 (花園大学)

3 月 4 日 「擬制 (フィクション) としての課徴金」 石岡 克俊 (慶應大学)

3 月19日 「鏡、分割、規範ー ビエール・ルジャンドルにおけるフィクション」

橋本 一径 (東京大学・博士課程)

4 月23日 「心理療法における表象と表象不可能性」 大山 泰宏 (京都大学)

5 月21日 「フィクションとデモクラシーー 理論と実践」 セバスチャン・ヴェグ (香港 CEFC)

6 月 4 日 「虚構の中の真理ー ディドロ『運命論者ジャックとその主人』をめぐる」

王寺 賢太

6 月18日 「Fiction から fixion へー 精神分析はフィクションについて何を語れるか」

立木 康介

7 月 9 日 「フィクションの生態学ー ベイトソンの思考を手がかりに」 田辺 明生

- 10月15日 「ケーテ・ハンプルガー『文学の論理』を読む」 久保 昭博
- 11月 5日 国際シンポジウム「西洋のフィクション・東洋のフィクション」  
「フィクション能力からフィクションの諸芸術へ」  
ジャン＝マリー・シェフェール (EHES)
- 「歴史からフィクションへー近代中国文学成立の諸問題」  
セバスチャン・ヴェグ (CEFC)
- 「現代小説とフィクションの変容ーブルーストの場合」  
ユアナ・ヴルトゥア (EHES)
- 「私小説とフィクション」 大浦 康介
- 11月19日 「『共同体の物語り』とフィクション」  
森 明子 (国立民族学博物館)
- 12月 3日 「共和制「末期」というフィクションをかたる」 鷲田 睦朗  
(大阪国際大学非常勤講師)
- 12月17日 「擬制としてのグルジア義賊」  
伊藤 順二

# 文明と言語

班長 横山俊夫

当研究班は、文明化過程において言語という社会媒体がどのように変容するか、その諸相を前近代の文芸から現代科学にいたる多様な分野から検討しようとの意図で2002年度に発足。2007年3月に当初予定した5年間の活動を終え、整理期間としての2007年度には、16回の研究会会合のほか、報告書執筆に精進した。また、いわば副産物として次の報告書や提言が、班員の言語意識を背景に生まれた。

1)『難波鉦ー松之部抄』(共同研究拾遺ー続編2007.12), 2)『京都提言2007/Kyoto Proposals 2007』(共編, 和英両文2007.12), 3)『第9回京都大学国際シンポジウムー人間の安全保障のための地球環境学/中間報告書』(共編, 和英両文2007.12)。また、次の催事の企画も、当研究班の活動の一端を反映したものである。1)「小さな写真展」法然院(2007.8-9), 2)「ゲノムひろば」大阪OMMビル(2007.10)。

## 研究会記録(2007年)

- 1月20日 『難波鉦』輪読「手詠」 廣瀬千紗子  
「女節用集再考」 横山 俊夫
- 2月 3日 『難波鉦』輪読「印問答」 深澤 一幸
- 2月17日 『難波鉦』「初冠」倉島訳稿補訂 全員  
同 輪読「大番」 後藤 静夫
- 3月10日 『難波鉦』輪読「納戸」 遠藤 彰  
同「後連」武田訳稿補訂 全員
- 3月24日 『難波鉦』輪読「二字論」 岡田 暁生  
同「二重腰」山極訳稿補訂 全員
- 4月21日 島津記念館見学, 報告書打合せ 全員
- 5月12日 「京大国史の「民俗学」時代ー〈文化史学〉の魅力と無力」 菊地 暁
- 5月19日 「劉 炫の説得力」 古勝 隆一
- 6月 2日 『難波鉦』輪読「枕箱」 菊地 暁
- 6月30日 「千里眼者あるいは表象の多様」  
田中祐理子  
「文明と文字の発展ー及び東南亜細亜に於ける文明成立と文字に就いて」  
セルゲイ・ラブチェフ
- 9月29日 『難波鉦』輪読「埋火」 横山 俊夫  
「清末日本で覗かれた趙飛燕姉妹」  
深澤 一幸
- 10月27日 『難波鉦』輪読「品定」 古勝 隆一  
「幹細胞研究の新聞記事の分析」  
川上 雅弘
- 11月10日 『難波鉦』輪読「火廻」 斎藤 清明  
「〈貞節〉から〈夫婦愛〉へー明治の浄瑠璃『壺坂霊験記』の読まれ方」  
ゲスト: 細田明宏氏
- 11月16日 「寄生と共生ー松枯れを通して考える」  
ゲスト: 二井一禎氏
- 11月30日 「東アジア漢字文化圏における文字と文学」 金 文京  
「語りの表現と時間ー太夫は何故演奏時間を気にするか」 後藤 静夫
- 12月15日 「口と手の関係ー身体表現のベイスックス」  
ゲスト: 野村雅一氏  
「マンチェスターの太極拳」 倉島 哲
- 12月22日 『難波鉦』輪読「衣かづき」  
深澤 一幸

# 人文学報

同「一時雨」 遠藤 彰  
 なお、『人文学報』Vol. 95 集報には、当研究班の  
 2006 年の活動概要のみが掲載され、研究会記録が  
 漏れておりました。余儀なく以下に掲げます。  
 研究会記録（2006 年）  
 1 月21日 『難波鉦 ― 梅之部抄』製本打合せ

2 月4日 「余録 金沢の浦上四番崩れ」 全員  
 後藤 静夫  
 「『難波鉦』と色道諸分文学」 廣瀬千紗子  
 2 月17日 「山本序周の『絵本故事談』」 横山 俊夫  
 「音楽批評家だった哲学者」 岡田 暁生  
 3 月3日 「中井桜洲の紀行詩について」 深澤 一幸  
 3 月13日 『難波鉦』輪読「忍付」 田中祐理子  
 「カンボジア文明の起源」 セルゲイ・ラブチェフ  
 5 月8日 「山本序周論」 横山 俊夫  
 「技を語る言葉」 倉島 哲  
 5 月27日 「君臨の条件」 岡田 暁生  
 「感染を語る言葉」 田中祐理子  
 6 月3日 「浄瑠璃語と標準語」 細田 明宏  
 「進化物語の空隙としての生態学の舞  
 台」 遠藤 彰  
 6 月17日 伊丹市旧岡田家住宅ほか見学 全員  
 7 月1日 「万の文反古」 廣瀬千紗子  
 「覗き見の復権」 深澤 一幸  
 8 月4日 尻叩会 報告書作成準備会 全員  
 「狩蜂をどのように語るか ― 第3部」 遠藤 彰  
 「感染をかたる言葉（続）」 田中祐理子  
 「山本序周論（続）」 横山 俊夫  
 「技を語る言葉（続）」 倉島 哲  
 9 月30日 鉦叩会 『難波鉦』校訂「初冠」 倉島 哲  
 10 月14日 同上「初冠」（続） 倉島 哲  
 「音楽の起源」 山極 寿一  
 11 月4日 「珠算算法の言語力」 武田 時昌

「人形浄瑠璃の大道具」 後藤 静夫  
 11 月18日 『難波鉦』校訂「釣針」 古勝 隆一  
 「今西錦司の〈言葉〉」 斎藤 清明  
 12 月16日 「ゲノムを語ることば」 加藤 和人  
 「遊女文化源流考」 荒牧 典俊

## 人種の表象と表現をめぐる学際的研究

班長 竹沢泰子  
 本研究班の主たる研究成果は、2008 年度、京都  
 大学国際シンポジウム開催と本の出版という形で行  
 う予定である。本年は、その成果発表に向けて、全  
 体の理論的枠組みづくりと執筆分担者の個別の研究  
 を進化させることに力を注いだ。本研究班の狙いが、  
 表象を実態と照らして批判するという古典的表象研  
 究にとどまるのではなく、人種の実在性をリアルに  
 感じさせる、表象のエージェンシーとしての役割に  
 注目することを再確認した。ジェンダーやセクシュ  
 アリティとの交錯にかんしては、形質人類学から映  
 画評論に至るまで関係するゲスト・スピーカーを1  
 月から12 月までの間に4 名招き、研究班の射程を  
 広げる努力をした。9 月には執筆予定者が集まり合  
 宿を行って、互いの第一草稿の合評会を行った。  
 研究会記録（2007 年）

1 月13日 「再考：西洋美術における異邦人表現  
 の伝統 ― 〈東方三博士の礼拝〉図像  
 をめぐって」 高階絵里加  
 「植民地から〈人種〉を再考する ― ア  
 ン・ストローラーによる試み」 水谷 智、永淵 康之  
 1 月14日 「アフロ系子孫のアイデンティティ創  
 生は可能か？― チャベス再選後のベ  
 ネズエラにおける民族運動」 石橋 純  
 「保守『科学』と『人種差』『性差』論  
 叢」 瀬口 典子（ゲスト：モンタナ大学）  
 3 月10日 「日本映画のイデオロギー分析 ― 1930  
 年代の女性表象を中心として」 宜野座菜央見（ゲスト：鶴見大学）  
 4 月13日 「再び〈人種〉を問う：用語と人類学  
 （者）」 スチュアート ヘンリ

- 「〈混血〉研究の系譜学 ― 日本における人類学・人類遺伝学と人種主義（経過報告）」 坂野 徹
- 4月14日 「映画〈人間みな兄弟〉をめぐる部落問題の表象」 黒川みどり  
「今後の予定と共同研究の問題提起」 竹沢泰子，出席者全員
- 5月18日 「〈哀れなカフェイ〉とは何者か？ ― 黒い肌のチャーティスト」 小関 隆  
「各章の構成とキーワード『人種表象とリアリティ』」 執筆者全員
- 6月29日 「『ネルソンの死』と『イングランドの偉大さの秘密』の間 ― 黒いヴィクトリア朝人再考」 井野瀬久美恵  
「アメリカスポーツ界における人種主義 ― ジョン・ホバマン著『アメリカのスポーツと人種』の出版とその反響を中心に」 川島 浩平
- 7月20日 「チャベス政権下ベネズエラにおける多文化主義と人種主義」 石橋 純  
「ヒトゲノム研究と人類の多様性 ― 科学が社会と出会うとき」 加藤 和人  
「人種とゲノム」の今 ― アメリカ合衆国における最近の議論をめぐる 竹沢 泰子
- 7月21日 「『民族』の展示の現在，2007」 吉田憲司（ゲスト：民博）  
「植民地朝鮮の医学者・医者と人種論」 李 昇燁
- 9月28～30日 「多文化主義が去った後に ― アジア系アメリカ人アーティストたちの抵抗と自己表象」 竹沢 泰子  
「映画『橋のない川』にみる部落問題表象」 黒川みどり  
「〈哀れなカフェイ〉とは何者か？ ― 黒い肌のチャーティスト」 小関 隆  
「『黒人アスレティシズム』という幻想 ― 日本人にとっての人種観・イメージと運動能力」 川島 浩平  
「西洋美術における異邦人表現の伝統 ― 〈東方三博士の礼拝〉図像をめぐる 高階絵里加
- 「虚ろな表情のドイツ人 ― ナチスの農民表象をめぐる」 藤原 辰史  
「混血と適応能力 ― 日本における人種研究の系譜学」 坂野 徹  
「『顔が変わる』 ― 朝鮮植民地統治と朝鮮人の『見分け』」 李 昇燁  
「もうひとつの『ネルソンの死』 ― 黒人と女性なぜ描き加えられたのか？」 井野瀬久美恵  
「アフロ系子孫の民族創生とメディア戦略 ― チャベス政権下ベネズエラにおける人種主義と多文化共生」 石橋 純
- 11月10日 書評 貴堂嘉之翻訳 ロバート・リー著『オリエンタルズ』 石川 禎浩  
「虚ろな表情の『北方人』 ― 「血と土の芸術」の農民表象をめぐる」 藤原 辰史
- 12月15日 ディスカッション 加藤和人論文・李昇燁論文  
「1970代からの表象理論の趨勢について」 齊藤 綾子  
(ゲスト：明治学院大学)
- 啓蒙の運命 ― 系譜学の試み** 班長 富永茂樹  
2007年の『啓蒙の運命』共同研究班は18回の研究会を開催し，20世紀における18世紀ヨーロッパ思想史・文化史研究と諸々の「啓蒙」論をふりかえった初年度と，主に19世紀ヨーロッパにおける「啓蒙」の受容のありさまを見なおした第2年度の共同研究の延長線上に，1) 19世紀から20世紀にかけての世界における「啓蒙」の受容・変形・批判の諸相の検討，2) 18世紀ヨーロッパのいわゆる「啓蒙」の時代の再検討の2つを主要な課題として進められた。この前者については，とりわけ日本を含むアジア，あるいはロシア，ユダヤ人共同体といったヨーロッパから見た周縁において「啓蒙」の名で呼ばれる現象の理解と，ヨーロッパにおける18世紀から19世紀の転換点に現れた「啓蒙」とその後の連続性と断絶性の理解とが焦点となった。こ

の過程で、『百科全書』研究で知られるパリ第十大学のマリー・レカ＝ツィオミス教授や、ロシアとヨーロッパの文化的交渉史を専門とする、モスクワ世界史研究所のセルゲイ・カルプ教授らをゲストに招き、活発な議論を持つことができたのも実に喜ばしい経験であった。

2007年の夏期休暇前まで、20世紀から18世紀に遡るかたちで展開された「啓蒙」の系譜学的探究は、共同研究に参加する班員の共通了解の地平を作り出すためのものであったが、後期からは、共同研究の成果報告を念頭に、それぞれの班員が自らの個人研究を発表する段階に移行している。多様な関心を持つこれらの個人研究は、1) 18世紀の思想を同時代の社会史・政治史とつきあわせながら新たな解釈を提示する試み、2) 「啓蒙」に近代の政治や社会の基本構想を生み出した起源を認め、それが19世紀以降どのように批判されつつ受容されていったかを明らかにする試み、3) 近代の諸学(医学・法学・社会学など)や、それらの諸学への批判をはらむ知的な革新(精神分析など)が、「啓蒙」ととりもつ関係を明らかにする試みの3つに大別することができる。これらの個別研究の交錯からは、互いの視点を補いつつ、全体としてヨーロッパの18世紀との関係において20世紀にいたる世界史を読みなおす、新たな思想史的な展望が開けることが期待されよう。

#### 研究会記録(2007年)

- 1月19日 「十八世紀前半ドイツ文学(現象)における「快楽の活用」の言説」  
田邊 玲子
- 2月2日 「ヘーゲルと〈啓蒙〉—〈知〉のリミットをめぐる」 佐藤 淳二
- 2月16日 「啓蒙の時代と証券投資」 坂本優一郎
- 3月2日 「『百科全書』と同時代の辞典」  
ゲスト: マリー・レカ＝ツィオミス
- 3月16日 「ゼーヴ・シュテルンヘルによる反啓蒙の系譜学」 上田 和彦
- 4月20日 「東アジア世界の科学啓蒙」  
武田 時昌
- 5月11日 「ロシアの啓蒙君主制と啓蒙の哲学者たち—20世紀後半におけるいくつか

の歴史叙述パラドクス」(コメント: 橋本伸也) セルゲイ・カルプ

- 6月15日 「啓蒙と革命—「哲学者たち」の運命」 桑瀬章二郎
- 6月22日 「『合理的な選択』仮説と啓蒙の知性観をめぐる」 長尾 伸一
- 7月6日 「ユダヤ的記憶の解体と再構成」  
向井 直己
- 7月21日 「非欧世界における啓蒙の位相—主題・方法・担い手をめぐって」  
山室 信一
- 9月21日 「トクヴィルと啓蒙」 富永 茂樹
- 10月5日 「ルイ・パストゥールと“啓蒙の運命”」 田中祐理子
- 10月12日 「革命前グルジア農村における啓蒙活動: 週刊『輻』紙上にみる」  
伊藤 順二
- 11月2日 「文人の世紀—北学派から蕨葎堂へ」  
高橋 博巳
- 11月16日 「ラカンの「カントとサド」をめぐる三つの思想史」 立木 康介
- 11月30日 「コンドルセからコントへ—啓蒙の転換」 北垣 徹
- 12月7日 「パートナー交換から「法的に倫理的な愛」へ—モーツァルト・オペラにおける恋愛啓蒙の運命?」岡田 暁生

#### 近代古都研究班

班長 高木博志

「古都」とは、天皇がいなくなった「旧都」(ものとのみやこ)である。1869年の東京「奠都」(てんと)による天皇の畿内よりの離脱は、古代から近世をつらぬく王権の基盤を編成替える日本史上の事件であり、奈良・京都という古都形成の起点となる。

さて「近代古都研究」班は、「近代京都研究」班(2003—2005年度、丸山宏班長)を発展させ、歴史学・建築学・造園学・美術史などの諸分野の研究者による総合的な研究をおこなっている。「歴史と都市」をひとつの手がかりとして、京都のみならず、奈良・首里・伊勢や地方城下町といった「近代古都」を研究対象にしている。

「古都」は近代に生みだされたものであり、その

言葉は古都保存法（1966年）以降の戦後社会に定着する。2003年に大津が古都保存法で指定（10番目）され、金沢等の城下町も対象として考えられつつある。また冠せられた「古都」というイメージと都市行政のめざすものは、必ずしも一致したわけではない。「近代京都研究」班で明らかになったように、つねに工業・産業振興を行政の基盤におく京都府や市の姿勢があったことなど、その理念と実態には歴史的にズレがあった。したがって研究会では大々で、「古都」（園田英弘氏のいう「みやこ」の王宮性・首都性・都会性）とみなされている場を対象とし、近世から現代までのスパンで、学際的に自由な議論を重ねてきた。

近世史についても、「古都」の多様性を考える上でも、そのあり方の解明は不可欠である。研究会を重ねるなかで、日本における「古都」論を考えてゆけたらと思う。また将来的には慶州や西安などのアジアの古都やヨーロッパの古都についても研究の射程にいれてゆきたい。

今年度は、とくに近代の学知である文献研究とフィールド調査（巡見）を連関させるべく、洛中御霊社巡り、金沢、元興寺・奈良公園、京都御苑などの実地で研究会を行った。

班員 岩城卓二、金文京、高階絵里加、谷川穰、水野直樹（以上、所内）、秋元せき、飯塚一幸、井上章一、井原縁、伊従勉、内田和伸、大場修、岡村敬二、長志珠絵、小野健吉、小野芳朗、河西秀哉、桐浴邦夫、工藤泰子、黒岩康博、小林丈広、清水愛子、清水重敦、鈴木栄樹、Henry Smith、高久嶺之介、田島達也、田中智子、谷山正道、中川理、中嶋節子、並木誠士、奈良勝司、羽賀祥二、幡鎌一弘、原田敬一、日向進、廣瀬千紗子、福井純子、福島栄寿、藤原学、丸山宏、毛利紫乃、本康宏史、山上豊、山田誠、山田由希代、吉井敏幸、吉田栄治郎

研究会記録（2007年）

1月13日 「〈京都：今と昔〉— 京都の近代を留学生に教える— 提言」

ヘンリー・スミス

「趣味」から「土俗学」へ— 雑誌『郷土趣味』の展開

黒岩 康博

3月17日 「近代奈良の地域形成と名望家の動向

— 古都の整備に関連して」

山上 豊

「壬申宝物調査と法隆寺の宝物献納」

吉井 敏幸

4月21日 「定住と漂泊の能役者— 都市の境界と「庭」」

小野 芳朗

「大阪天神祭の変容と都市空間— 都市祭礼の近代」

中嶋 節子

5月19日 書評会：高木博志『近代天皇制と古都』

小林 丈広・井上 章一

6月16日 「最後の朝廷— 幕末の京都と慶喜政権」

奈良 勝司

「蔵書、その時代の過ごし方— 「満洲」に遺された書物を中心に」

岡村 敬二

6月30日 談話会：女性からみた町家住まいと祇園祭

小島富佐江・秦 めぐみ・

池上 英子・伊従 勉

7月21日 フィールドワーク 「洛中御霊社巡り（今宮神社、白峰宮、晴明社、幸神社、上御霊社など）」

案内者 廣瀬千紗子

10月13-14日 フィールドワーク 「金沢（石川県立歴博、護国神社、旧偕行社など）」

案内者 本康 宏史

書評会：橋本哲哉編『近代日本の地方都市』

高木博志・原田敬一・

小林丈広・田中智子・谷川 穰

11月17日 フィールドワーク 「奈良（元興寺、大乗院跡、奈良博、旧県庁など）」

案内者 吉井 敏幸

「西南雄藩と大和— 生駒市域の古文書調査をもとに」

谷山 正道

12月15日 フィールドワーク 「京都御苑（閑院宮邸跡、旧九条家拾翠亭など）」

案内者 小沢 晴司

（京都御苑管理事務所）

「近代京都における都市計画事業の計画主体をめぐって」

中川 理

「歴史遺産空間と地域社会— 栗林公園と城下町都市高松」

井原 縁



空間の再審 — 人文・社会科学の新基軸を求めて —

班長 山室信一

空間とは、時間とともに人間が自己と他者について認知していくための不可欠な枠組みであり、人間とその社会のありかたを追求すべき人文・社会科学においては、明確な概念規定に基づく体系化が要請されている。しかしながら、欧米近代の人文・社会諸科学においては、時間こそが基軸となっており、空間そのものを対象として捉えることに必ずしも成果を挙げてきたわけではない。しかも、グローバリゼーションの進行の中で空間の把握は時間や速度によって置き換えられつつある。しかし、グローバル化によって生活様式の平準化が進めば進むほど、機構や生態などの地理的条件、都市や建築などの空間形式の差異のありかたこそが、人間観・社会観そして世界認識のありかたをますます規定していく可能性もまた否定できない。

この共同研究では、自然環境と人間活動の関係や、生活空間としての都市・建築などの形成のされかた、そしてさらにそれが世界認識としていかに把握されてきたか、といった学知と実践知そのものを再審に付し、そこから新たな人文・社会科学の基軸を析出していくことをめざした。本年は、建築・海域世界・生態などの各種空間および空間の学知形成史についてフィールドワークを通じて、本研究班の活動を総括した。

研究会記録 (2007 年)

2 月 5 日 『『空間の再審』を再審する』および  
フィールドワーク 菊地 暁

2 月 18 日-19 日 空間に関する学知形成史の  
フィールドワーク

山室信一・早瀬晋三・

谷川 稔・坂本優一郎

3 月 11 日-13 日 海域世界および、科学技術と空  
間の関係についてのフィールドワーク

山室信一・谷川 稔・坂本優一郎

第一次世界大戦の総合的研究に向けて

班長 山室信一・岡田暁生

第一次世界大戦のインパクトの内実を、戦後世界を視野にいれつつ模索することが本研究班の目標で

ある。1 年目となる 2007 年度は、芸術、政治、経済、社会、思想のさまざまな分野において第一次世界大戦がどのような位置を占めるのか、問題を提起してもらい、その共通点と相違点を探った。また、Hew Strachen (ed.), The Oxford Illustrated History of the First World War の輪読を通じて、研究会の議論の基盤を構築するよう努めた。2007 年度の発表内容は以下の通りである。

研究会記録 (2007 年)

4 月 28 日 「第一次世界大戦研究のスコープ — 世界性と総体性の二重性をめぐって」

山室 信一

5 月 28 日 「音楽史における第一次大戦の「前」と「後」」 岡田 暁生

6 月 9 日 「ヨーロッパ統合の遠い端緒 — 第一次大戦、米国、J・モネ」 遠藤 乾

6 月 25 日 「塹壕の虚妄 — アイルランドから第一次大戦を見る」 小関 隆

7 月 15 日 「1914 年と 1877 年を分かちもの — 第一次大戦は最終次露土戦争か？」

伊藤 順二

7 月 23 日 「言語不信の文学 — フランス戦争小説における口語文体」 久保 昭博

9 月 24 日 「認識と決断 — 文化をめぐる知と政治 第一次大戦前後のドイツを中心に」

王寺 賢太

10 月 13 日 「古典主義運動と不定形なもの — 第一次世界大戦期前後のフランス文学」

森本 淳生

10 月 29 日 「ヨーロッパにおける第一次世界大戦 関連モニュメント、資料紹介」

山室信一・坂本優一郎・藤原辰史

11 月 18 日 「比米日三角関係史のなかの第一次世界大戦 — 日米戦争へと至る道」

早瀬 晋三

11 月 25 日 「食糧戦争 — 「カブラの冬」の教訓」 藤原 辰史

12 月 10 日 「戦争神経症は精神分析に何をもたらしたか」 立木 康介

◎人文研アカデミー「第一次世界大戦と芸術」

5 月 17 日 「トラウマ — 第一次世界大戦を体験し

- た作曲家たち」 岡田 暁生  
 5月24日 「危機と再生 — 秩序の回復へ」 高階 秀爾  
 5月31日 「イタリア無声映画の栄光と没落 — ジョヴァンニ・パストローネ『カピリア』(1914)を巡って」 石田 美紀  
 6月7日 「ダダと戦争 — チューリッヒからパリへ」 塚原 史  
 ◎レクチャーコンサート  
 11月27日 「1912/ 1939 — 2つの『世界大戦前夜』/ 2つのピアノソナタ」 岡田暁生・小坂圭太

## 王権と儀礼

班長 藤井正人

本共同研究(2005年4月-2009年3月)は、王権と儀礼との関係を古代インドの王権儀礼を中心に研究することを目的としている。ヴェーダ文献を基礎資料にしているが、インド学の諸分野のほか、歴史学、考古学、美術史、人類学などの複数の視点から資料を分析するとともに、さまざまな時代と地域における王権と儀礼に関わる問題を比較研究の対象としている。

隔週に開いている研究会では、会読と報告をほぼ交互に行なっている。会読では、ヴェーダ祭式文献の中から王即位式(ラージャスーヤ)に関するすべての箇所を読解し、この儀礼に関する全資料の訳注と研究をめざし、現在、約4分の3の検討を終えている。報告については、今年度はこれまでにインド中世史、考古学、言語学、ヴェーダ祭式学からの報告を受けた。来年度は、会読では残り部分の読解を終えた後、出版に向けて作成資料の編纂を行なう予定である。報告では、論文集の原稿作成に向けて個々の研究に検討を加えるとともに、会読の成果をさまざまな角度から分析することを予定している。

研究会記録(2007年)

- 1月19日 (報告会10)  
 The Pahlavi Bundahishn and the relationship between Iran and the East. Daryoosh Akbarzadeh  
 2月2日 (会読13)  
 Vadhula-Srautasutra 10, 6, 43-7, 20

大島 智晴

- 2月16日 (報告会11)  
 Vidarbha, Daksina Kosala, North Bengal — 近年の遺跡発掘状況を中心として 横地 優子  
 6月1日 (報告会12)  
 Purusamedha, Vastupurusa, Manas-arapurusa: Theory and material evidence for the Vedic Agnicayana Altar, human sacrifice, construction sacrifice, and the 'Man of the Homestead' (Vastupurusa) in ancient India. Hans Bakker  
 6月15日 (総括)  
 これまでの会読のまとめと、これからの研究の進め方 藤井 正人  
 6月29日 (報告会13)  
 南アジアにおける2つの文明社会 — インダス文明とガンガー文明 上杉 彰紀  
 11月2日 (報告会14)  
 ベンガルの詩的言語 — 吟遊詩人パウと古ベンガル語の仏教賛歌集チャルヤーパダ 北田 信  
 11月16日 (会読14)  
 Vadhula-Srautasutra 10, 7, 21-42 横地 優子  
 12月21日 (報告会15)  
 ヴェーダ祭式体系における王権儀礼の発展:  
 Rajasuya — Asvamedha — Purusamedha — Sarvamedha 手嶋 英貴

## 人文研探検

班長 岩城卓二・菊地 暁

本研究班は、まもなく80周年を迎える人文研の歴史を、基礎的データに基づいて検証し、日本の人文・社会科学のあり方を再検討する試みである。本研究班の対象は、人文研の活動により産み出されたさまざまなプロダクトであるが、大別して、1)人文研の研究者により執筆された著作、2)人文研が擁した人的資源、3)人文研の活動により集積され

た資料群、4) いわゆる「共同研究」スタイルから「カード・システム」といったさまざまなレベルの方法的蓄積、がある。これらを相互に関連させつつ、時代状況との相関において把握することが本研究班の課題となる。本年は初年度であり、基礎的データのリストアップ作業を主眼とした。文書整理や関連研究機関の所蔵資料調査、人文研のプロジェクトに携わった研究者からの聞き取り調査、などである。

研究会記録 (2007 年)

- 4 月 9 日 文書整理
- 4 月 12 日 相談会
- 4 月 16 日 文書整理
- 4 月 27 日 分館見学会
- 5 月 17 日 文書整理
- 5 月 18 日 本館見学会
- 6 月 29 日 大阪市大新村文庫見学会
- 7 月 25 日 文書整理
- 8 月 3 日 文書整理&相談会
- 10 月 2 日 奈良本辰也文庫見学会
- 10 月 19 日 相談会
- 11 月 9 日 文書整理
- 12 月 7 日 「雲岡石窟の調査と東方文化研究所」

向井 佑介

- 12 月 15 日 「口と手の関係 ― 身体表現のベシックス」(横山班と共催)

野村 雅一 (ゲスト)

#### アジア・ネットワークの研究 班長 籠谷直人

儒教の基本は、祖先崇拝 (孝) だから、本籍に住むことが優先される。それゆえ「僑寓」は本籍の対峙概念であり、いずれは帰郷することを前提にした。それゆえ、「僑」をある集団として使うことはなかった。他方、「華」は文明の中心を示したから、中心から移動した人や対象には使わなかった。華人という表現は、いずれは帰国する人物を含意したのであり、もしそうした意味の拘束をさけるのであれば、「唐人」という表現をつかった。つまり、中心からはなれた海外移住者には、中国の政治文化の原則からややはずれた「私人」を含意させたほうがよかった。

しかし、こうした私人の活動に政治的な枠をはめ

たのが、近代ヨーロッパの東漸を契機とする条約概念の浸透であった。中心から離れていても「中心を意識する集団」としての「華僑」像が創造された。1842 年の南京条約は、主権、人民、領土を規定し、国家概念を東アジアに持ち込んだ。1844 年にイギリスは、海峡植民地に生まれた人を「イギリス臣民」として保護をあたえることを宣言した。清朝としてもその対抗策としては、海外の中国人を「清国臣民」であると主張する必要があった。つまり 19 世紀になって清朝帝国は、「華僑」、つまり「中心からはなれた集団」の存在を追認したのである。

華僑という表現の成立には送り出し先の郷里 (中華帝国) と移住先 (ヨーロッパの植民地) との政治的な利害交渉の錯綜から生まれた。近年に華僑と華人をわける表現も移住先で中国籍を有する前者と移住先の国籍を取得した後者を区別する中国本国の意思を反映したものであった。そうであるとすれば、アジアの各地域に分布する華僑華人を研究対象にすることは、ヨーロッパ帝国主義の東漸から引き起こされた近代の再編を描くことになり、送り出し側の中国の帝国社会のあり方、そして、受け入れ先の地域であるアジアの植民地、主権国家の個性を議論することにつながろう。歴史学における西洋中心史観や一国史観からも捉えがたい華僑華人ネットワークを、「制度」として議論したい。D. ノースによれば、制度とは「人間がお互いにかかわりあうときの不安定さを軽減するために考案された構造」であり、それは法律のような公式的な規制や、「規範や慣習」のような非公式的な制約から構成されるルール束であった。

ヨーロッパでは、権力が私的所有権にたいする恣意的な統制や、財産の没収という「横暴」にできることを抑制した。公権力を相対化し、安全を確保する市場インフラが形成されてこそ、ヨーロッパの工業化が可能であった。M. ウェーバーによれば、「産業資本主義は、法秩序の恒常性・確実性・没主観性・法発見 (司法) や行政の合理的な・原理的に計算可能」性が高くなる必要がある。他方で、中国では、市場を完全に近づけようとする、議会や、裁判所、取引所、そしてイデオロギーなどのインフラが、権力と商人との間でつくられなかった。代議制など

によって公権力を相対化して、投資の安全を確保する「計算可能性」が高まらなかったゆえ、中国の工業化は遅れたと指摘されてきた。

しかし、近年の中国の明清史研究の文脈は、公権力の「横暴」を強調していない。むしろ清朝は、人の移動に制度的な規制を加えない開放性と流動性を備えていた。帝国にとっては沿岸交易によって台頭した経済主体が、王権への反抗勢力になることを未然にふせぐことに関心があり、そうでないかぎり移動や交易に介入する意思はなかった。そうした開放性を背景に、商人は権力の後援をうけなくても、地縁・血縁・業縁を通して取引コストを引き下げる工夫をこころみだ。主権国家や私的所有権のような制度がなくとも、農業の商業化とプロト工業化による市場展開がみられた。商人のギルドやネットワークのような中間組織、そして村落共同体、家族などの制度が、取引コストを切り下げて、市場の拡張に貢献した。

清朝の中国では、地租の金納化、商品作物の増加によって人口が増加した。資源に対して人口がふえると、中国では二つの対応があった。第一は、余剰労働を吸収する労働集約型経営であり、第二の対応は、移動を通して、家族労働を地域外で吸収することであった。土地などの資源の足りない郷里で競争を繰り返せば、人々は共倒れとなるから、人々は移動という戦略で競争社会に対応した。郷里の競争を念頭に、華僑が外地に赴くときに、生存の戦略としては、勤勉、節約、順応が徳目となり、移住先での社会的上昇の成功率を高くする可能性がある。

生存の戦略として、移動が選ばれば、家族の構成員と協働するよりも、個人の才能を活かすことが優先された。それゆえ、教育への投資も重視された。近隣や宗族が奨学金や旅費を与えることもよくみられたように、移動には教育水準の向上による人材育成が求められた。そして、教育投資が、各人の才能を引き出すのであれば、決して単純な労働に就くのではなく、科挙の試験に合格することや、才能を生かした出稼がすすむ。たとえば、科挙の試験に合格して、官界や学者になって上昇すれば、郷里の栄誉になる。そして才能を生かして、商人や海員として海外に赴き、成功して、送金すれば、郷里に錦を

飾ることになる。商人や海員のネットワークは、商品、熟練、使用人の補充を郷里から調達したから、さらに地縁・血縁・業縁のネットワークを伸張させた。日本のように「イエ」の維持は優先されず、むしろ、血縁、地縁、同郷、同方言の集団から良質な労働力を引き出すことが重要であった。

華僑が、「族譜」をつくるようになるのも、その外地で移住者が増加し、家族が増えて、先祖の廟の香炉や位牌をもって祭りを定期的に開催したことを含意した。そこでは確かな血縁のつながりでなくても、信用できる人材を兄弟と擬制して、その系譜に含みこむことも可能である。日本のイエでは、貯蓄を利殖にむけて、息子たちに労働を課して富を増やそうとするが、中国では貯蓄を利用して、兄を農民に仕立てたあとには、残った子供たちを、それぞれの能力に応じて仕事を習得させる。この対照は、人は「生産力の理論」に従うのか、それとも「価値の理論」に従うのかを問っている。

研究会記録（2007年）

3月5日 国際シンポジウム「アジア・ネットワークの研究」中央研究院台湾史研究所  
所 籠谷直人、大石高志  
(神戸市外国語大)、上田貴子  
(近畿大)、陳來幸(兵庫県大)、  
城山智子(ゲスト：一橋大)

## 東方学研究所

### 中国絵画の総合的研究

班長 曾布川寛

中国絵画の資料は、発掘に基づく古代・中世作品の出現、伝世する近世作品の公開などによって、近年ますます増加の一途をたどっているが、多くは未消化のまま放置されているのが現状である。この膨大な資料に対して、まずデータベースによる系統的聖理が必要であり、また多方面からのアプローチが要求されている。本研究班は可能な限り資料を収集し、様式論、図像学、画論、技法はもとより、パトロン、蒐集などの観点から考察し、更に書法・篆刻、詩文などの面からのアプローチも加え、総合的な研究を試みる。今年度は人文研アカデミー・連続セミナーにて、「東西交流の主役 ソグドの美術と言語」

と題し4名が特別発表したほか、班員及びゲストスピーカーによる研究発表は、以下の通りである。

研究会記録(2007年)

- 1月29日 「「形」についての考察」 宇佐美文理  
 3月5日 「彬県大佛寺石窟大佛洞造立年代について―貞観創建説に対する再検討」 張 南南  
 3月19日 「趙孟頫筆「紅衣羅漢図巻」について」 西尾 歩  
 「高剣父と京都画壇」 西上 実  
 4月28日 「「山東省の佛像」解説」 片山 寛明  
 5月14日 「『古今著聞集』と中国画論」 河野 道房  
 5月21日 「帝釋天善見城攷―眞諦訳『佛説立世阿毘曇論』について」 外村 中  
 6月11日 「『劉雪湖梅譜』と文人ネットワーク」 小林 宏光  
 6月25日 「竹田画帖における構図の特質―《亦復一楽帖》・《船窓小戯帖》を中心に」 吉村富美子  
 「瀟湘八景図の順序を巡って」 呉 永三  
 7月9日 「唐代の海図について(続考)」 竹浪 遠  
 9月17日 「「上海―近代の美術―」解説」 弓野 隆之  
 10月15日 「ガンダーラ塑像の研究―人文研所蔵資料の再検討」(共同発表) 向井 佑介・下垣 仁志  
 10月29日 「広元皇澤寺第二八窟試論」 金 銀児  
 11月12日 「安伽・史君墓中の宴飲図」 齊 東方  
 11月26日 「河清元年(562)銘像からみた中国・北朝期河北地方の造像傾向」 徐 男英  
 12月10日 「元末四大家の絵画研究序説―黄公望と倪瓚」 曾布川 寛

西陲發現中國中世寫本研究 班長 高田時雄

19世紀末以來、敦煌・トルファンさらに東トル

キスタン各地の遺蹟から數多くの寫本が発見された。しかし、これらの寫本の研究は、資料の公開整備が格段に進んだこと、寫本研究の方法が嚴密化したことなどにより、近年全く新しい段階に入ったと言える。本研究班では、漢文寫本を中心とし、歴史・宗教・言語・文学など様々な角度から検討を加え、西陲發現寫本の總合的な研究を展開する。なお昨年度の報告は『敦煌寫本研究年報』(創刊號)として刊行された。

研究会記録(2007年)

- 4月23日 「敦煌石窟畫塑材料中的麵粉和油」 高 啓 安  
 5月7日 「『現在十方千五百佛名並雜佛同號』(敦研068號背面)について」 山口 正晃  
 6月4日 「フランス國立圖書館所藏のナム語文獻」 池田 巧  
 6月18日 「『文場秀句』小考―「蒙書」と類書と作詩文指南書の間」 永田 知之  
 7月2日 「流動するテキスト―敦煌寫本成立の一例」 高田 時雄  
 9月10日 「長興四年中興殿應聖節講經文(P.3808)をめぐる」 松浦 典弘  
 「薩布試解」 王 丁  
 10月22日 「吐魯番アスターナ第341號墓(65TAM341)出土「景龍三年十一月南郊赦文」研究」 辻 正博  
 「李盛鐸舊藏『摩訶衍經』卷第八の文獻學的考察」 落合 俊典  
 11月19日 「大乘菩薩戒と密教―S2272V「金剛界大毘盧遮那佛攝最上乘秘密甚深心地法門傳受蜜法界大三昧耶修行瑜伽心印儀」を中心に」 齋藤 智寛  
 「ペリオ将来『佛説(天地)八陽神呪經』に関する調査報告」 玄 幸子  
 12月3日 「大和寧國藏の華嚴經について」 赤尾 榮慶  
 「俄藏敦煌本『新集文詞九經抄』と法藏敦煌本『新集文詞教林』に関する二・三の寫本學的考察」 米田 健志  
 12月17日 「美國哥倫比亞大學東亞圖書館所藏敦

煌文獻小考」 余 欣  
「西州百姓遊撃將軍石染典と六胡州の  
關係について」 中田 裕子

りあげる。  
研究会記録（2007 年）  
2 月 27 日 『『通雅』卷三八宮室 庭燎』

高井たかね

#### 漢簡語彙の研究

班長 富谷 至

2007 年も、従来と同じく『居延漢簡釈文合校』  
を主要なテキストとして、図版および『居延新簡』、  
『敦煌漢簡』等の他の辺境出土簡牘を参照しつつ、  
漢代西北辺境出土簡牘史料中の語彙を収集し、その  
語義を確定した。

担当者および担当範囲（『居延漢簡釈文合校』の  
簡番号）は次の通り（敬称略）。

研究会記録（2007 年）

富谷 至… 7. 6～8. 6  
杉村伸二… 8. 7～10. 2  
宮宅 潔… 10. 3～10. 30  
角谷常子… 10. 31～11. 12  
佐藤達郎… 11. 13～13. 6  
鷹取祐司… 13. 7～14. 22  
米田健志… 14. 23～15. 25  
森谷一樹… 16. 1～18. 5  
井波陵一… 18. 6～19. 20

本研究班にて確定させた語彙数は、2007 年末の  
時点で、のべ 1255 ヶとなった。

また、一月十九日には、徐世虹（中国・中国政法  
大学）・金秉駿（韓国・翰林大学）両氏による研究  
報告がなされた。題名は次の通り。

「説“正律”与“旁章”」 徐 世 虹  
「漢代聚落分布的变化：墓葬和縣城的距離分析」  
金 秉 駿

#### 傳統中國の生活空間

班長 田中 淡

中國の傳統的な生活空間および造形、すなわち具  
體的には住まい、宮殿、庭園、あるいは家具配置、  
室内空間、日常生活と儀禮等々の諸相をととして、  
その特質を探る。時代・地方を限定せず、また建築  
空間に限らず、廣義的な意味で日常あるいは儀禮の  
生活空間を対象として、中國學の關連分野および東  
アジア、周邊地域の専門家の参加を得て、多様な研  
究主題をとりあげてゆく。研究発表と併行して會讀  
するテキストとして、明・方以智『通雅』宮室をと

4 月 17 日 「An Exploration into the Residen-  
tial Environment in Tang Chang'an  
唐長安城 CG 復元研究（CG 併映）」

王 才強 Heng Chye-Kiang

4 月 17 日 「元大都の皇城における庭園」

福田 美穂

5 月 8 日 「インド佛教の庭園デザインと古代中  
國の庭園」 外村 中

5 月 8 日 「『西遊補』の庭園・建築群」

大平 桂一

6 月 9 日-10 日 國際シンポジウム「傳統中國の  
庭園と生活空間」（於京都市勸業館み  
やこめっせ 後援：日本學術振興會、  
（財）國際花と緑の博覽會記念協會）

6 月 26 日 見學會「舊秀隣寺庭園」

10 月 9 日 『『通雅』卷三八宮室』 眾愚

高井たかね

10 月 23 日 『『通雅』卷三八宮室』 眾愚

高井たかね

11 月 13 日 「遼代佛塔をめぐる諸問題」向井 佑介

11 月 27 日 「四川・雲南調査報告（スライド併  
映）」 福田 美穂

2007 年 6 月 9 日-10 日の両日、本研究班が中核  
となって企画運営した國際シンポジウム「傳統中國  
の庭園と生活空間」（於京都市勸業館みやこめっせ  
後援：日本學術振興會、（財）國際花と緑の博覽會  
記念協會）が開催された。この種の主題を掲げた國  
際シンポジウムは史上初の試みであったが、海外か  
ら 12 名の招待講演者を含む 16 名による充實した研  
究発表・講演が行われ、国内外から 100 名を超える  
参加を得て、終始白熱した議論が續き、好評裡に閉  
會した。

#### 三教交渉の研究（2）

班長 麥谷邦夫

本研究班は、「三教交渉の研究」研究班の後を承  
け、引き續き中國中世における儒佛道三教間のかか  
はりをさまざまな角度から研究することを目的に、

2005年度から5年間の豫定で組織された。2007年は、陳垣『道家金石略』所収の隋唐道教關係碑文のうち以下の七碑の解讀を行つた。

奉仙觀老君像碑  
八都壇神君實錄  
奉仙觀老君像碑  
潘尊師碣  
升仙太子碑  
嵩高山啓母廟碑銘  
木潤魏夫人祠銘

**北朝石刻資料の研究** 班長 井波陵一

前年度に引き続き、人文科学研究所所蔵の北朝石刻資料に関して、文字の対校、および訓読・語注の作成をおこなった。2007年に取り上げた資料は、「元景造石窟記」「高慶碑」「石門銘」「嵩顓寺碑」「北魏石窟寺碑」である。

**20世紀中国の社会システム** 班長 森 時彦

清末から現在にいたる100年間における中国の社会システムの変動を多様な側面から総合的に検討することを目的として2003年4月に発足した本研究班は、2008年3月をもって5年間の研究期間を終えることになっている。本年の発表は報告論文集に掲載予定の論考についての予備報告を中心におこなわれ、若手研究者の意欲的な報告が多くを占めた。

研究会記録（2007年）

2月2日 「青島における新聞史の開始」

高 瑩瑩

2月16日 「日中戦争期における「国防映画と辺境」」

韓 燕麗

4月27日 「庶民のための書き言葉を求めて — 清末から民国へ」

蒲 豊彦

5月18日 「上海共同租界警察 — 文書とシステム」

石川 禎浩

6月1日 「陶行知とデューイ」

川尻 文彦

6月15日 「清末、広東における地方自治政策と自治研究社」

宮内 肇

6月29日 「領域化する郷 — 四川農村の近代」

小島 泰雄

9月28日 「メコン河上流域における英仏対立と

清朝」 望月 直人

「青島新聞業の開始 — ドイツ時代における青島の近代新聞」 高 瑩瑩

10月19日 「清末山東黄河治水策の終焉」

細見 和弘

11月16日 「近代的職業外交官の登場 — 外務部期の改革を中心に」 箱田 恵子

11月30日 「韋君宜から見た中国革命史再構築の試み — 作家、編集者、革命家の視点から」 楠原 俊代

12月14日 「明治期雑誌記事と魯迅の「スバルタの魂」」 森岡 優紀

**漢字情報学の構築** 班長 安岡孝一

昨年に引き続き、白文に対する自動「点」打ちプロジェクトの研究をおこなった。具体的な方法としては、返り点のついた漢文を「教師データ」とし、そこから形態素解析用のコーパスと辞書を生成することにした。この方法で、ある程度の白文は自動処理できる感触を得たが、「教師データ」の量が現状では不十分であり、さらに研究を進めるためには、さらに多くの「教師データ」を準備する必要を痛感した。

**中国古代の基礎史料** 班長 浅原達郎

引き続き、上海博物館蔵楚簡を読んだ。昔者君老・内礼（1月26日）、容成氏（2月2日～2月23日）と進み、容成氏はまだ読了していない。

『日古』第8号（3月23日）を刊行し、「読上海博物館蔵楚簡札記序」（浅原達郎）を掲載した。上海博物館蔵楚簡の解読の過程で、竹簡の見ために注意することの重要性に気づいたので、そのことを論じている。

2007年3月をもって3年の所定の期間を終了したが、ゴールのある研究班ではなく、そのままの姿勢で新しい研究班に移行する。

**銀雀山漢墓竹書残簡の整理 — 中国古代の基礎史料**

班長 浅原達郎

中国古代の基礎史料班をそのまま継続し、基礎的な史料や論文を読んでいくが、平行して「銀雀山漢

墓竹書殘簡の整理」という課題を設定した。とりあえずは、すでに公表された銀雀山漢簡を呉九竜『銀雀山漢簡釈文』の番号と対照していくところから、作業を始めている。

前班から引き続き基礎学習は、論文と古文字資料の二本だてとし、論文は裘錫圭「從馬王堆一号漢墓“遺冊”談關於古隸的一些問題」(4月20日～11月2日)から始めて、同じく「寒食与改火—介子推焚死伝説研究」(11月16日～12月21日)にとりかかったところである。資料は、引き続いて上海博物館蔵楚簡・容成氏(4月20日～27日)を片づけ、次に、班員の希望のあった鄂君啓節(5月11日～6月8日)を読み、また上海博物館蔵楚簡にもどって、周易(6月15日～10月19日)、中弓(10月26日～11月30日)と読み進み、恒先(12月7日～21日)にとりかかっている。

読書記録をまとめる作業はなお遅れていて、『曰古』第9号(4月6日)に郭店楚簡の五行・魯穆公問子思・窮達以時、『曰古』第10号(9月14日)に郭店楚簡の唐虞之道・忠信之道および鄂君啓節の札記を公表した。

#### 陰陽五行のサイエンス

班長 武田時昌

陰陽五行説は、物類や自然現象の法則性や相互関係を説明する原理として大いに用いられた学説であり、中国の諸分野において独自の理論構造を生み出すパラダイム的な役割を果たした。これまでの研究においては、陰陽五行説の成立過程や配当説、それを援用した漢代の政治思想等に詳しい考察が試みられてきた。しかしながら、三国時代以降の史的展開や理論構造の特質については、十分な検討がなされているわけではないように思われる。そこで、自然学に限らず思想、宗教から文学、諸技芸に至る多彩な分野において、天人感応、物類相感等を含めた陰陽五行の説明原理が、実際にどのように活用されているのかを分析し、包括的、複眼的な見地からその構造と特色あるいは限界性を考究したいと考えている。

2007年は、引き続き『五行大義』巻二、『医心方』巻二を会読するとともに、『春秋繁露』郊祀諸篇の読書会も行った。また、朱建平教授(中医科学院中国医史文献研究所副所長、中華医史雑誌編集委

員長)、水口幹記助教授(浙江工商大学日本文化研究所)を招いて、特別講演会を開催した。詳しい内容は左記の通りである。

#### 研究会記録(2007年)

- |        |                         |       |
|--------|-------------------------|-------|
| 1月13日  | 『五行大義』巻二, 論徳            | 石立 善  |
| 1月16日  | 『医心方』巻二                 | 閻 淑珍  |
| 2月4日   | 特別講演「近二十年来中国的医学文化史研究」   | 朱 建平  |
| 2月20日  | 『医心方』巻二                 | 閻 淑珍  |
| 4月28日  | 『五行大義』巻二, 論合            | 森村 謙一 |
| 5月19日  | 『五行大義』巻二, 論合            | 森村 謙一 |
| 6月5日   | 『春秋繁露』祭義篇               | 武田 時昌 |
| 6月12日  | 『春秋繁露』郊祭篇               | 木村 亮太 |
| 6月24日  | 『五行大義』巻二, 論合            | 森村 謙一 |
|        | 『五行大義』巻二, 論扶抑           | 多田 伊織 |
| 7月3日   | 『春秋繁露』四祭篇               | 木村 亮太 |
| 7月21日  | 『五行大義』巻二, 論扶抑           | 多田 伊織 |
|        | 特別講演「天地瑞祥志について」         | 水口 幹記 |
| 7月24日  | 『春秋繁露』四祭篇               | 木村 亮太 |
| 8月4日   | 『医心方』巻四                 | 武田 時昌 |
| 8月7日   | 『医心方』巻二                 | 閻 淑珍  |
| 10月16日 | 研究発表『春秋繁露』郊祀諸篇の錯簡部分の再検討 | 木村 亮太 |
|        | 研究発表「劉完素の人物と著作について」     | 三鬼 丈知 |
| 10月20日 | 『五行大義』巻二, 論扶抑           | 多田 伊織 |
|        | 『五行大義』巻二, 論相剋           | 村田 浩  |
| 11月6日  | 劉完素『素問玄機原病式』            | 三鬼 丈知 |
| 11月17日 | 『五行大義』巻二, 論相剋           | 村田 浩  |
| 11月27日 | 研究発表『黄帝内経』の陰陽五行説        | 熊野 弘子 |
| 12月15日 | 『五行大義』巻二, 論刑            | 橋本 昭典 |



元代の法制

班長 岩井茂樹

2004年度から発足したこの研究班は、元朝時代の行政文書・法制文書の会読をつうじて、その時代の制度と社会について知見をひろめることを目的としている。参加者それぞれが、会読の作業のなかから研究すべき課題を見だし、この時代の制度と社会の特質を理解する足がかりを得ることを期待している。とくに、前後の時代との連続と断絶という問題について洞察を深めたい。すでに『大元聖政国朝典章』28～33および『新集至治条例』所収の礼部にかかわる部分の会読を終えた。当該部分について、校訂電子本文を閲覧・検索するWebアプリケーションを公開するとともに、『東方学報』京都第81冊、同第82冊に『元典章 礼部』校定と訳注として、巻28、巻29の訳注を掲載した。本年度は、班員およびゲストによる研究報告のほか、新出の『至正条格』についての検討をおこなった。2007年1月～12月の報告題目と担当者を掲げる。

研究会記録（2007年）

- 1月16日 「室町日本の朝貢使節と貢使宋素卿」  
山崎 岳
- 2月6日 「無商不国 ― 清末、一人の候補官の北京旅行」  
伍 躍
- 2月20日 「宋夏元符和議と遼宋事前交渉」  
毛利 英介
- 3月6日 「興中府三学寺と1160年代金朝の寺観政策」  
Jesse Sloane
- 3月20日 「北宋末の蔡京一族」  
藤本 猛
- 4月17日 「清初の内外互用論と内陞外転論」  
小野 達哉
- 5月15日 「江海の賊から蘇松の寇へ」  
山崎 岳
- 6月5日 「徽州明代訴訟関係文書から見た事件処理過程」  
岩井 茂樹
- 7月3日 「李齊賢在元事跡考 ― 峨眉山奉祀行」  
金 文京
- 7月17日 「『至正条格』臆議」  
植松 正
- 9月18日 「『至正条格』出現の意義と課題」  
植松 正
- 「元刊本『至正条格』について」  
金 文京

10月16日 『元典章』礼部校定本の検討

10月30日 『元典章』礼部校定本の検討

11月20日 『元典章』礼部校定本の検討

中国近世日用類書の研究

班長 金 文京

本研究班は、これ以前の「元代の社会と文化」研究班を受け継いで、中国近世の代表的な日用類書である『事林廣記』の会読を行い、訳注作成を目的としたものである。ただし『事林廣記』は大部の書物であり、前の研究班から6年をかけて、ようやく全体の約3分の1を読み終わったのを機に、ひとまず終了することとした。訳注の一部は『東方学報』に発表した。全体の成果報告をどのような形で出すかについては、今後、検討するつもりである。なお「元代の社会と文化」研究班については、昨年10月に、研究成果として『元刊雜劇の研究－三奪槊・氣英布・西蜀夢・單刀会』（共著 汲古書院）を刊行した。

唐代文学の研究

班長 金 文京

本研究班は、正倉院所蔵、光明皇后親筆として有名な唐代の書儀（手紙の文例集）『杜家立成雜書要略』の会読、訳注作成を目的としている。本年度は、全体で36ある往復書簡文例のうち、第8までを読了、訳注原稿を作成した。また10月には、大谷大学文学芸学会との共催により、南京大学教授、曹虹氏の講演会（題目「李清照と魏晉風流」）を開催した。

真諦三蔵とその時代

班長 船山 徹

今年度は下記の内容について訳注を作成し、検討を行った。（ ）内は訳注担当者。『続高僧伝』法泰伝、智愷伝（坂内栄夫）、同・曹毘伝、智敏伝、道尼伝（古勝隆一）、同・曇遷伝（麥谷邦夫）、真諦撰『部執論疏』佚文（加納和雄、大竹晋）、真諦撰『解深密經疏』佚文（齋藤智寛、藤井淳）、真諦撰『金光明經疏』佚文（潘哲毅、三宅徹誠）、真諦撰『大乘論義疏』佚文（那須良彦、室寺義仁）、真諦撰『九識章』佚文（吉村誠）。また、『九識章』の意義と問題点について、全員による討論会を開いた。

## 中国古鏡の研究

班長 岡村秀典

漢代の銅鏡は、図像紋様の変化がいちじるしく、考古資料の年代をはかる指標として東アジア各地で重視されてきた。また、その図像と銘文は、漢人の精神世界をものがたる資料としても注意されてきた。そのような視角に留意しながら、昨年につづき音韻論から漢鏡の銘文を論じた B. Karlgren, "EARLY CHINESE MIRROR INSCRIPTIONS" (BMFEA, No. 6, 1934) を会読した。平行して実施した研究発表は以下のとおり。

## 研究会記録 (2007 年)

- 1 月 9 日 「中国古鏡における陰陽五行的銘文表現 (続)」 光武 英樹  
 1 月 30 日 「魏晉鏡の仏像」 向井 佑介  
 2 月 13 日 「三角縁神獣鏡の研究史」 下垣 仁志  
 2 月 27 日 「魏晉南北朝代の装身具」 鞆 文  
 4 月 10 日 「羅振玉「鏡話」と清朝の古鏡研究」 岡村 秀典  
 4 月 24 日 「銅鏡生産の変容と交流」 森下 章司  
 5 月 22 日 「南朝鏡の設定」 岡村 秀典  
 6 月 12 日 「山東臨淄発見の漢代鏡范について」 廣川 守  
 7 月 3 日 「古鏡研究の思想」 山 泰幸  
 10 月 16 日 「羅振玉以後」 岡村 秀典  
 10 月 30 日 「山東出土鏡范の研究 (2)」 廣川 守  
 11 月 20 日 「三角縁神獣鏡の銘文」 下垣 仁志  
 12 月 11 日 21 世紀 COE 国際シンポジウム「漢字文化三千年」

## 中国社会主义文化の研究

班長 石川禎浩

冷戦体制の終結以後、いわゆる“社会主義の文化”は世界中で風化しつつあるが、今日の中国には、社会主義的な文化様式やイデオロギーがなお根強く残存している。

現にそれらは、一般民衆の思考様式になお影響を与え、現体制の文化政策を方向付け、そして中国共産党史の歴史記述を強く規定している。また、20 世紀中国における社会主義文化の展開は、同時代日本の社会主義文化の影響を受けたばかりでなく、戦

後には日本の中国学に大きな影響を与えたことも忘れてはなるまい。2006 年 4 月より三年計画で発足した本研究班は、20 世紀中国の社会主義文化の諸相を主に歴史的視点から研究することを目指している。2 年目に入った今年は、4 月の京都大学現代中国研究拠点 (人文研附属現代中国研究センター) の発足に伴い、同拠点の研究グループ 1 の事業という性格を合わせ持った活動を行った。本年の報告は以下の通りである。

- 1 月 26 日 「孫文の科学観形成 — 香港西医書院とジェームス・カントリー」 武上真理子  
 2 月 9 日 「知識人と「辺疆」問題 — 顧頡剛を中心に」 島田 美和  
 4 月 20 日 「西北歴史争論問題始末 — “敏感”な歴史問題は如何に処理されてきたか」 石川 禎浩  
 5 月 11 日 「文革期の地下文学 — “手抄本”作品の出版とその研究」 瀬辺 啓子  
 5 月 25 日 「陳独秀の「最後の見解」をめぐる」 江田 憲治  
 6 月 22 日 「画家・何香凝に関する一考察」 竹内 理樺  
 7 月 6 日 「沈從文について — 作品「辺城」の題記に関する考察」 佐原 陽子  
 7 月 13 日 「中国現代思想史上的“自由主義”」 章 清  
 7 月 20 日 「京都大学の中国近現代史研究」 狭間 直樹  
 9 月 21 日 「日中戦争前期における中国共産党の党軍関係に関する一考察」 田中 仁  
 10 月 5 日 「「倭寇」と資本主義萌芽論争」 山崎 岳  
 10 月 12 日 「清末における湖南教育総会の位置づけ — 提学使呉慶坻の教育行政との関わりから」 宮原 佳昭  
 10 月 26 日 「冀魯豫区の中共基層組織と会党」 丸田 孝志  
 11 月 9 日 「社会主義文化としてのスポーツ」 高嶋 航  
 12 月 7 日 「清末の“自由主義”」 川尻 文彦